

ひと
愛媛の女性14 —— 劇作・演出家 井上佳子さん



一生、前衛。

取材・文 編集工房インデックス
撮影 畑中正司

へ人より先に、
少しでも多くの知識を」
芸術には、才能や資質はもちろんだが、それを伸ばすための環境が必要なのだというのが、井上さんの話でわかる。

とにかく恵まれている。井上さんの祖父は松山市長を務め、父親は道後でホテル「青海楼(道後館の前身)」を営んでいた名家。祖父母ともに歌舞伎、長唄などの古典芸能に造詣が深く、井上さんも物心つくころから日舞や清元などの舞台に立った。

また、映画好きの父親の影響を受けてほとんどの名画を鑑賞し、中学時代には自分なりに批評を書いていったというから、その早熟ぶりに驚かされる。家族の話題はいつも芸術文化という環境に身を置き、演劇の専門誌を愛読し、映画館の暗闇に目をこらし、演劇、オペラ、音楽会など、およそ松山で上演される舞台を逃すことはなかった井上さんは、松山東高で本格的に演劇と出会い、ここで初めて演出を手がけた。

〈明治に井上あり〉

「大学はどこでも良かった。とにかく東京に行くかと思った」
井上さんは、明治大学に入学し、

十五年間、オリジナル作品の上演を続け、毎公演、二千人の観客を動員する人気劇団「イリュージョン」。井上佳子さんは、中央とのレベル較差が大きいといわれてきた地方の演劇を遜色ないものにまで高めてきた主宰者である。東京で、演劇に明け暮れる生活を送った大学時代、「二生、時代の最先端にいよう」と覚悟を決めたという井上さんの半生は、聞けば聞くほど演劇人になるべくしてなった印象を受ける。ともすれば離れてしまいうる夢のしっぽを強く握りしめ、愛媛で舞台芸術を花開かせた井上さんの物語は、まさしくドラマだ。



松山市コミュニティセンターでのリハーサル

【井上佳子プロフィール】 劇作・演出家。道後中学、松山東高をへて、明治大学に進む。在学中にプロの演劇人も参加する「新制作座」を創立。卒業後、多くの劇団の旗揚げに参加。帰松後、1986年、劇団「イリュージョン」を50名の団員で結成。年1回のオリジナル公演を柱に、アトリエ公演、ダンス公演など、文化を発信しつづけている。劇団外でも活動し、昨年、県民ミュージカル「ドリームシップ」の作・演出を担当して好評を博した。県演劇協議会副会長、県・松山市生涯学習推進講師、県医療技術短大非常勤講師。

演劇部に入部。当時、明大演劇科には唐十郎氏（日本を代表する劇作家・演出家、劇団「状況劇場」主宰）も在籍し、かなり高水準の活動を展開していた。だが、趣味的な集まりになりがちな演劇部で物足りなさを感じた井上さんは、大学三年の時「新制作座」を立ち上げた。

「やるからには、一番前衛的な、前線のものをやりたいかった。人より先にものを知って、先に進んでいることを絶対に行っていたんです」
時代はちょうど、サルトルに代表

される実存主義が台頭し、演劇の世界でもイヨネスコ、ベケットなど、いわゆる不条理劇と呼ばれる新しい作劇法が世界を席巻した頃だった。それまでリアリズム演劇一辺倒だった日本に「ゴドーを待ちながら」や『授業』が初めて上陸し、時代の先端を突っ走る井上さんもそれに衝撃を受けた。

「ポエムも美も笑いもある。すこく皮肉な奇妙な笑い。そのくせ、心臓に弾を撃ち込まれたようにドーンとくるすごさ。あれで演劇の価値観ががーんと変わってしまった。その後、日本にも多くの若手劇作家が誕生しましたが、ほとんどがその模倣に終わってますね」

首都圏の有名大学二十校あまりでつくっていた「学生演劇連盟」の明大代表として活躍していた井上さんも、卒業を期した。多くの仲間が次々と劇団を旗揚げし、井上さんもその手伝いに奔走したが、芝居で食べていけないのは今も昔も変わらない。食うや食わすの生活をしながら離散集合を繰り返す演劇人の中にあつて、井上さんは限界を感じ、松山に帰ることを考えた。演劇一筋に突き進んできた井上さんが初めて味わった挫折だったかもしれない。

〈結婚、渡米、離婚〉

母親が亡くなったことがきっかけとなつて、二十四歳で松山に帰った井上さんを待っていたのは結婚だった。東京のテレビ局に勤める人と見合い結婚したが、「自分の歩く方向と違う」相手との生活は一年で終わつた。

二度目の結婚で、夫がノースウェスタン大学（シカゴ）に行つたことから、井上さんも一年間アメリカで暮らすことになった。井上さんはここでも恵まれた。シカゴやニューヨークで片っ端から芝居を見ていったが、その大学も演劇が盛んで、優れた映画人を数多く輩出していたので



では、それらに対抗できる手段はあるのだろうか。
「やはり『愛』しかないですね。クロール人間はつくれても、愛はつくれないし、インプットできない。同族で殺しあうのは人間だけです。それが、そんな中で人間が前を向いて進めるのは、『愛』があるから。そうでなければ、人間は地球上で一番醜い動物でしょう。人間の中にはなんかのかたちで、遺伝子の中に美しく清く平和で愛に満ちたいという気持ちがある。だから、芸術を生み、

文化を生んできたと思うんです」
三カ月かかって書き上げられた次の白本は、劇団員の手で清書され、その後、井上さんの演出家としての仕事が始まる。
「自己表現は存在の証明」
イリュージョンの芝居は、ギャグをちりばめたテンポの速いせりふ回しに、歌やダンスが加わるというものだ。しかし、前衛をめざす人が、ミュージカルと銘打つことに抵抗はなかったのだろうか。
「最初は少しありましたね。けれど、よくよく考えてみれば、歌舞伎も能も、ダンス&ミュージックなんですね。ここは歌の方がよりよく表現できる、そんなふうに分流のミュージカルをつつたんです」
平均年齢二十一歳。劇団員たちの練習は、火曜から土曜まで三時間程度行われる。仕事や学校を終えての夜の練習だが、とにかく役者が生き生きと輝いている。創立以来、常に二十人という観客を動員できるのも、イリュージョンの役者に根強いファンがついているからだ。
「私の役割は、一人ひとりの持っている個性、その人だけが持っている

る光るものを出してあげるんです。それをどう育てるかは、やはり演出力でしょうね。叱らないと伸びない人、言い過ぎるとくじける人、みんな異なる個性を見極めた上で適切な演技指導をする。人間の最大の喜びは、自分を表現することで。その一番美しい表現法は舞台です。だから役者は三日したらやめられななんです」
井上さんがオーディションで見るとは、才能ではなく、やる気があるかどうか。下手でもいいが、持続力がなければ役者はつとまらない。
「上手い役者には誰でもなれますが、上手いことより、いい役者の方がいい。これが難しい。そこには努力もいるし、上っ面だけで演じない、心も大切になるんです」
井上さんの指導によって多くの若者が才能を開花させ、より大きな舞台をめざしていった。イリュージョンからは、これまで東京の「劇団四季」に数名が入団している。
「夢のしっぽ」
「東京に行きたかったら、行かないでだめ。夢のしっぽを手から離すかどうかは本人が決めることなんです」

帰松以来、今も観劇のため、年に数回は上京するという井上さんは、東京にどんな思いを持っているのだろうか。若い劇団員のように、より大きな舞台と観客を手にしたいとは思わなかったのだろうか。
「確かに東京は観劇人口が圧倒的に多いので、メディアも発達しています。でも、東京でもいいと思える作品は十本に一本あればいい方です。だから、場所は関係ない。役者の質は全然変わらぬ。イリュージョンの役者ならどこでも通用します。いいものは自分が作り出せばいいんです」
先日、井上さんは大学演劇連盟の同窓会に出席した。メンバーのほとんどが演劇の世界から去り、会社員としてゴールの定年を迎えようとしていたという。その中で、演劇少女の面影を持ち続け、現役の作・演出家として活躍する井上さんは、往年の青年たちの目にどんなにまぶしく映ったことだろう。
かたや井上さんも、「芝居やって遊んだらって、会社で出世するのよね」とほがらかに笑う。常に前衛であり続ける演劇人でありながら、演劇から離脱していった仲間たちに向けるまなざしは、限りなく温かい。

イリュージョンの劇団員は、オーディションを通じた中学生から30代まで、約50人の大所帯。8月の公演に向けて熱の入った練習が続く。



ある。
「私が八年前にやったイヨネスコの『授業』を、彼らが前衛として演じてましたが、とにかく勉強になりました。台本の解釈もアメリカ人と日本人では違う。ラブシーン一つとっても、アメリカは肉体的に演じていくけど、日本はお茶漬け風。そういういろいろな差を観るのは非常に面白かった」
帰国した井上さんは、一女をもうけたが、やはり一年半で結婚生活にピリオドを打った。主婦ということばも、妻ということばも嫌。単に男性をサポートする奥さんには向いていなかったという井上さんは、進歩的なフェミニストの父や祖母の影響からか、幼い頃から男女平等の精神を持ち、自分自身のために生きていきたいという思いが強くなったのだという。
学生時代、「劇場が私の庭」だった井上さんの豊富な知識と実績をもつてすれば、既成の作品に飽き足らなくなるのは時間の問題だった。子どもの手を引いて松山の劇団の手伝いを続けていたが、「そのうち、どれを観てもつまらなくなって、自分のやりたい作品の方が面白いぞと思ったんです」

こうして一九八六年、友人知人を集めて、初のオリジナル作品「吸血鬼インジャパン」を上演。この作品のヒットにより、劇団「イリュージョン」が誕生した。
「左手に科学雑誌、右手にペン」
祖父が建てたという純和風の家が井上さんの住まい。その一室で井上さんは、「二作失敗したら劇団は終わり」の呪縛に苦しみながら、左手に科学雑誌、右手にペンを持ち、「頭の中を無茶苦茶狂わせて」机に向かうという。
時代の最前線に立つ人は、時代の足音に耳をそばだて、次の時代を模索する。では、井上さんは今の時代をどう読んでいるのだろうか。
「今は本当に大変な社会で、テクノロジーが人間の思想、感覚を超えて先に進み、人間が後からついていっている。どうしようもなく混乱して、人間性を失っている時代だと思っています。臓器は切り売りされ、人間をパーツ、モノとして考える。クロールや遺伝子操作によって人間の進化の道を変えていく。そうした自然を超えた行為によって、人間は狂気の時代に入っている——その前触れが少年たちの犯罪だと思っています」